記念館会報　Vol. 28　　2020. 6. 15

NPO
中帰連平和記念館
CHUKIREN HEIWAKINENKAN

第 23 回　「中帰連に学ぶ会」

中帰連との関連で中国をどう見るか
歴史的展望のなかで考える

東大名誉教授 庄司興吉

「撫順の奇跡」と呼ばれる事件を、私は本当に奇跡であったのだとは考えていない。毛沢東、周恩来をはじめとする当時の中国の指導者たちは、中国革命の精神を体現し、日本人民が中国に来てさまざまな残虐行為を行ったのは、けしかけた日本の帝国主義や軍国主義者のせいであり、人民はどの国でも歴史の基礎で相互友好が可能なのだから、これからは中日人民も理解し合い連帯してそれぞれの社会、すなわち人民社会を作っていくべきだと考えて、あのような処遇を行ったのだと思う。

【講師の庄司興吉先生】

毛沢東はその後、主観的能動性という極度の主意主義で、人民の社会にだから人民がその気になれば何事もなせると考え、大躍進、文化大革命などの大混乱を引き起こしていったが、そのそばにいて周恩来 は、指導部仲間が次つぎに消されていくのを巧みにかわしながら、一貫した信念と現実主義で中国革命の最小限の形と内容を守り続けていったのだと思う。彼のこの姿勢は 1970 年代の鄧小平に引き継がれ、鄧は改革開放で党支配の体制を維持したまま経済成長の開始に踏み切った。経済成長の進行は学生・知識層の期待を膨らませ、天安門事件が起こったが、現実主義が貫かれ、中国革命の伝統を引き継ぐ民主主義は先延ばしされた。その後、江沢民時代と胡錦濤時代とを経て習近平時代になり、経済成長の実績のうえに「中国の夢」に象徴されるような、新たな理念主義が乗せられようとしてきている。

20 世紀から 21 世紀に入り、中国を先頭とする旧従属国植民地国の力量増大が続き、米欧日「先進」国の守勢化と自国防衛主義が進むなか、中国が大中華民族主義もどきに傾くのは遺憾であるが、他方で人類運命共同体の建設を掲げ、環境問題等に前向きな姿勢を示している面もある。中国人民社会の基層には「撫順の奇跡」を実現させた人民主義がなお残っ

目　　次

・第 23 回「中帰連に学ぶ会」 ･････････ 1
・中国から支援の「マスク」 ･････････ 2
・第 21 回「記念館資料室から」 ･････････ 2
・橋本勝の「風刺マンガ」 ･････････ 3
・「記念館蔵書」から ･････････ 4
・近況とご連絡 ･････････ 4
・「東京新聞」記事 ･････････ 4

【「中帰連に学ぶ会」2.2 記念館で】

ているはずであるから、生活の向上とともに「衣食足りた」人びとがこれを想起し、21 世紀の方向をリードする中国を、繰り返し人民主義の軌道に引き戻していくことを期待したい。そのためにも私たち日本人民は、台湾と朝鮮半島を植民地化し、中国東北部に「満州国」を虚構して、東アジアから東南アジアを支配下に置こうとした歴史を正確に認識し、台湾、朝鮮半島から中国本土の人びとの理解を得ながら、東アジアから東南アジアにかけて、21 世紀社会のモデルとなる人民友好社会を作り上げていくよう努力しなくてはならない。(「記念館」会員)

中国から支援の「マスク」届く！

日本でもコロナウィルスの感染が拡大する中で、「マスクが足りない」ことを知った「中国友誼促進会（友促会)」(中国の海外交流窓口）から、医療用マスク 1000 枚の支援が 5 月 2 日に記念館に届きました。

「友促会」からの要望で、ご健在の元中帰連の皆様と、高齢の中帰連ご遺族の皆様に送付させて頂きました。既にご遺族などからお

【箱には「日本加油！」(日本頑張れ！)】

礼の手紙も届いており、「友促会」にも記念館から御礼の手紙を送付させて頂きました。

届けられたマスクの箱には、「日本加油！」（日本頑張れ！）と応援メッセージの紙が貼ってあり、感謝の思いでいっぱいです。

記念館では以前から、中国の「撫順戦犯管理所旧址陳列館」や「友促会」などと交流を重ねており、来館もして頂いております。

大変な状況の中でこそ手を差しのべて下さったお気持ちに、当記念館としてもお応えしていかねばと思っています。

連載　記念館資料室から

第21回　戦前と戦後を貫く「帝国主義」の中で

石田隆至（「中帰連に学ぶ会」事務局）

『前へ前へ』第11号は、1958年5月23日発行です。

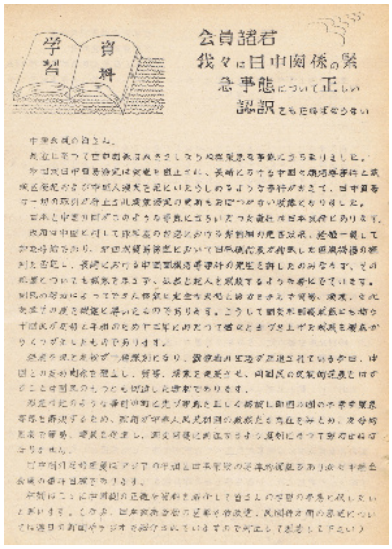
前年（1957年）の第1回全国大会を受けて各支部で展開されている活動の様子を伝える報告が、後半のページを占めています。とりわけ、後の補償要求運動に積極的な姿勢を見せた長野支部、熊本支部の具体的報告が目を引きます。両支部ともに多くの生活困窮者の具体的状況が記され、それ故に経済補償を求めて県議会などに請願運動を展開しています。

ただ、請願の結果はすぐには出ませんので、長野支部では相互支援のあり方も積極的に議論されています。本部で準備されていた「中連金庫」案に対しても、支部としての加入を決めましたが、出資金の拠出は容易ではありませんでした。**「全員完納しても〔出資金が〕不足であるといって、我々の本部及び支部の組織を解散することは絶対にしてはならないことであり、ぜひこれを盛り上げなければならないと結論に達しました。しかし会費をこれ以上引上げ（略）ることは、却って支部会員を団結させ得ず、会費納入に負担を感じ、支部組織よりだんだんと遠ざかることになることを恐れ、会費は今まで通り（略）とした」。**支部組織そして中帰連そのものの存続自体に重大な意義があると指摘されています。

一方、前半部分には2つの**「学習資料」**が掲載されています。**「今までとおもむきをかえ、（略）私達の認識を客観情勢と結合して発展させる事を考えての編集」**だとされています。一つは前回も紹介した**「劉連仁事件の顛末について」**、もう一つは**「我々は日中関係の緊急事態について正しい認識をもたねばならぬ」**と題されています。前者については、劉連仁さんが、中国から強制連行された被害者であるという身分問題を日本政府が頑として認めないまま帰国させたことに、強く抗議する内容です。後者は、日中間に国交のない中で民間貿易が積み重ねられてきましたが、岸信介政権になって**「蒋介石グループの機嫌を伺う」**姿勢を鮮明にし、中国共産党政権を**「敵視」**して信頼関係が破壊されたという**「緊急事態」**が念頭にありました。両者に共通する阻害要因は、**「日本政府は中華人民共和国を承認していない」**ことでした。つまり、戦争責任や外交関係を新中国と交渉すること自体にきわめて消極的だったのです。

しかし、侵略戦争の担い手であり、その反省に基づいて平和を希求していた中帰連の人々からすれば、こうした日本政府のあり方は、**「国民大多数の要望に逆行して、日中間になお継続している『戦争状態』の終末に努力することを好まない帝国主義外交気風」**としか映らないものでした。

特に、中国で死亡した日本人の遺骨送還を**「純然たる人道問題」**として中国政府に要求しながら、日本に連行されて虐殺・虐待された劉連仁さんと同じ境遇の中国人の遺骨送還や責任には一言も触れなかったことは見過ごせないものでした。この2つは、**「日本政府自らが国民に対して説明すべき事柄を、あたかも中国政府の責任であるかの如く装」**ったものだったからです。侵略のために中国に来て戦病死した日本人の遺骨送還を「純然たる人道問題」だと平然とすりかえてしまえるのは、攻撃的なのは中国側だと「見える」構造が続いていることを示唆しています。


学習資料

会員諸君
我々は日中関係の緊急事態について正しい認識をもたねばならない

＜帝国主義、植民地主義が戦後も連続している＞という観点は、現代の私たちにとっても有益なものではないでしょうか。ともすれば、中国が「強硬的」「膨張主義的」「抑圧的」な方針を採っていることが強調される昨今ですが、当時も今も、中国を封じ込め、敵視する帝国主義・植民地主義が連続しているという歴史的文脈を導入すれば、異なる像が浮かび上がってくるでしょう。現在の日米の政権の諸決定や判断には、重大な誤謬や矛盾、虚偽が孕まれていることは論を俟たないでしょう。そして、中国に対する責任転嫁、攻撃、敵対視は現在も見られます。にもかかわらず、中国が「強硬的」「膨張主義的」「抑圧的」だという評価は、政権だけでなく社会的にも広く共有されています。自国が他国に敵対的姿勢を示しているなかで、相手国の姿勢を「強硬的」「膨張主義的」だと非難する倒錯した評価が拡がるのは、その社会に「帝国主義、植民地主義」的気風が意識されないほど蔓延していることを物語っているといえるでしょう。

当時の中帰連の人々のこうした観点も、少数派であったことでしょう。われわれは今も中帰連の経験から、時代に向き合う貴重な視点を見出すことができます。

【「マスク２枚」で不満解消？】絵・橋本勝

「記 念 館 蔵 書」か ら

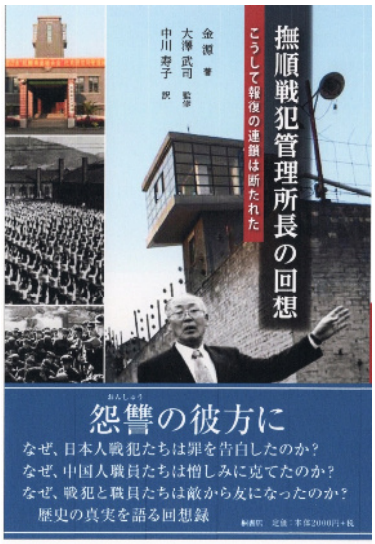
新刊　『撫順戦犯管理所長の回想
こうして報復の連鎖は断たれた』

撫順戦犯管理所の元所長・金源先生（2002.3.7 逝去・享年 75 歳）の貴重な「回顧録」が今月出版されました。

この本は「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」や「季刊中帰連」が中心になった金源先生の回想録を新たに翻訳出版したものです。

金源先生は中帰連の皆さんとは並々ならぬ信頼関係があり、帰国後も度々訪中し面会していました。鄭英順夫人はご健在です。

金源先生は夫人と共に非常に日本語が堪能で中帰連の皆さんとのコミュニケーションも非常にスムースでした。金源先生の貴重な「証言」です。



著者：金 源
監修：大澤武司
訳者：中川寿子

出版：桐書房 定価 2000 円 発行：2020.6.15
四六版　342 ページ（税、送料サービス）
※ご希望方は巻末の記念館の「メール、住所、電話、FAX」でお申込下さい。
（「振込用紙」同封でお送りします。）

近 況 と ご 連 絡

コロナで来館館者も問い合わせもありませんが、記念館は何時も通り開館しています。

理事会も総会も開けず例年ならこの春に「総会・会計報告」をしておりますが、今回このような状況で、次号の会報でご報告予定ですのでご了解お願い致します。

記念館では「講演会」などのご案内をメールでお伝えしております。連絡ご希望でまだアドレス未登録の方はアドレスをご連絡下さい。尚、その時に「記念館メーリングリスト」への参加の可否も合わせてご連絡下さい。

また「パソソコン、ネット」をお使いでな方には、葉書でもご連絡させて戴きますので、その旨ご連絡頂ければと思います。

記念館には図書資料の他に、中帰連や戦争関連の映像（DVD）も 200 本以上あり、時間のある方は記念館でご覧になれます。その「映像一覧表」（一部）はホームページの「資料」にも載せてあります。

『NPO 中帰連平和記念館』
〒 350-1175 埼玉県川越市笠幡 1948-6
TEL&FAX：０４９－２３６－４７１１
E-mail：npo-kinenkan@nifty.com
ＨＰ：http://npo-chuukiren.jimdo.com/
ＭＬ：npo-kinenkan@freeml.com
郵便振込口座名「NPO 中帰連平和記念館」
振込口座　：００１５０－６－３１５９１８
開館日：「水、土、日」（10:30 ～ 16:30）
（ご来館はなるべく事前にご連絡下さい）

（「東京新聞」2020.5.9）

欧州終戦75年、犠牲者追悼
メルケル首相ら献花

'20.5.9

【ベルリン＝近藤晶】ドイツが第二次世界大戦で連合軍に無条件降伏し、欧州での戦いが終結して七十五年を迎えた八日、ベルリンで式典が行われ、メルケル首相らが戦争犠牲者の慰霊碑に献花した。新型コロナウイルスの影響で規模が大幅に縮小され、参列者は限られた。

シュタインマイヤー大統領は演説で「私たちが過去から解放されることはない。記憶にとどめておかなければ私たちは未来を失う」と強調。「歴史的な責任を受け入れているからこそ、世界の人々から再び信頼されるようになり、私たち自身もこのドイツを信頼できる」と述べた。

また、過ちを「二度と繰り返さない」というドイツの誓いは「二度と孤立しない」ことを意味すると指摘。「私たちは欧州人として考え、感じ、行動しなければならない」と呼び掛け、新型コロナウイルスとの闘いにおいても欧州の結束が必要だと訴えた。

8日、ベルリンの戦争犠牲者の慰霊施設で献花するドイツのメルケル首相（手前）＝ゲッティ・共同